

茨城大学学報

第355号

令和3年2月～令和3年3月



「イバダイ・ビジョン 2030」を発表

INDEXz

- ◆ 農学部が日本農業技術検定優秀団体賞を受賞
- ◆ 将来ビジョンをテーマに学長と学生の懇談会
- ◆ 不二製油グループ本社と連携・協力に関する協定書を締結
- ◆ 令和2年度卒業式・学位記伝達式を挙行
- ◆ 令和2年度卒業式 学長告辞
- ◆ 「イバダイ・ビジョン 2030」を策定 太田学長が会見で発表
- ◆ 令和元年度台風19号災害調査団 最終報告書を発行

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 農学部が日本農業技術検定優秀団体賞を受賞

農学部は、2月4日、日本農業技術検定優秀団体賞を受賞しました。

この賞は、農業についての知識・技能の水準を客観的に評価する日本農業技術検定 1 級・2 級・3 級それぞれについて、同一検定回（年 2 回合計）において一定数以上の受験者がある試験実施団体、かつ合格率が一定率以上の上位団体を選定し表彰するものです。

農学部では今年度、実習科目「農学実習」と連動し、履修学生に農業技術検定の受験対策を実施。前年度の合格者が TA（ティーチングアシスタント）を務め、オンラインで農学科目の指導を行った結果、合格率が著しく向上し、その取り組みが評価されました。

合格した学生からは、「指導してくださった先輩方が、予備の知識やわかりやすい考え方を丁寧に指導してくださったので、講座がとてもプラスになりました」などのコメントが聞かれました。TA を務めた大学院農学研究科修士 2 年の松岡拓志さんは、「農業技術検定は農学分野の大学でも教わりきれない、より現場に沿った農業の知識を身につけその能力を示すことができるととても貴重な機会。ここで学んだことが研究や就職活動だけでなく、農業に意欲的な方々の学びのお手伝いにも活かすことができ大変嬉しい」と話しています。



検定に合格した農学部の学生と TA を務めた大学院生たち

◆ 将来ビジョンをテーマに学長と学生の懇談会

2月10日、学長と学生の懇談会をオンラインで開催し、86人の学生が参加しました。

本学では年2回、学長と学生の懇談会を開催しており、昨年4月に就任した太田寛行学長にとっては2回目の懇談会となる。現在、「イバダイ・ビジョン2030」と名付けた将来ビジョンの策定を進めていることから、「2030年の茨城大学」というテーマを掲げました。冒頭で太田学長は、「学生のみなさんにとって将来の母校がどんな大学であってほしいかを議論して、その意見やアイデアを吸収し、茨城大学のこれからを作っていきたいと思っています」と呼びかけました。

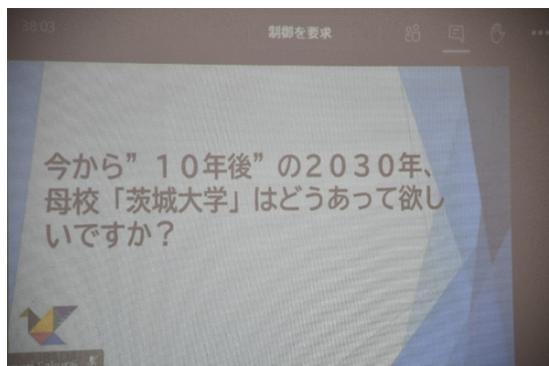
学生たちからは、「卒業して現場に出てからも相談できる場所であってほしい」、「研究力を高めるためにも、大学院進学のマインドを醸成する仕組みが必要」といった意見や、学部・研究科の枠を超えた交流機会を求める声が挙がり、太田学長らは真摯に耳を傾け、共感を示す様子を見せたり、説明や質問を加えたりしていました。

また、コロナ禍における課外活動の一律的な制限に疑問を呈した学生が、現状のビジョン案に課外活動についての表記がないことを踏まえ、「私がいま、茨城大学に足りないと感じるのは、学生の主体性を制度面から支える姿勢です」と述べると、太田学長は「学生たちがどんな活動をしたいかということに対し、われわれ教職員は、社会人の観点からリスクを伝え、議論する。その中で取り組みを発信する。そうして社会で評価されれば、大学としても嬉しいこと」と応じました。

事後アンケートでは、「自分の考えと違う意見も多くあり参考になった」「学長が茨城大学をどのような形にしていきたいかを、学長の言葉で感じる事ができた」などの感想が聞かれた一方で、「内容やテーマが大きすぎて、なかなか難しかった」「大学への不満を述べるだけの会となってしまった」などの指摘もありました。本学では懇談会で出された意見について、今後学内の担当部署と共有し、可能なものから改善を図っていくとしています。



懇談会に臨む太田学長



2030年の茨城大学について議論

◆ 不二製油グループ本社と連携・協力に関する協定書を締結 クロスアポイントメント制度を活用した新たな産学連携推進モデルを始動

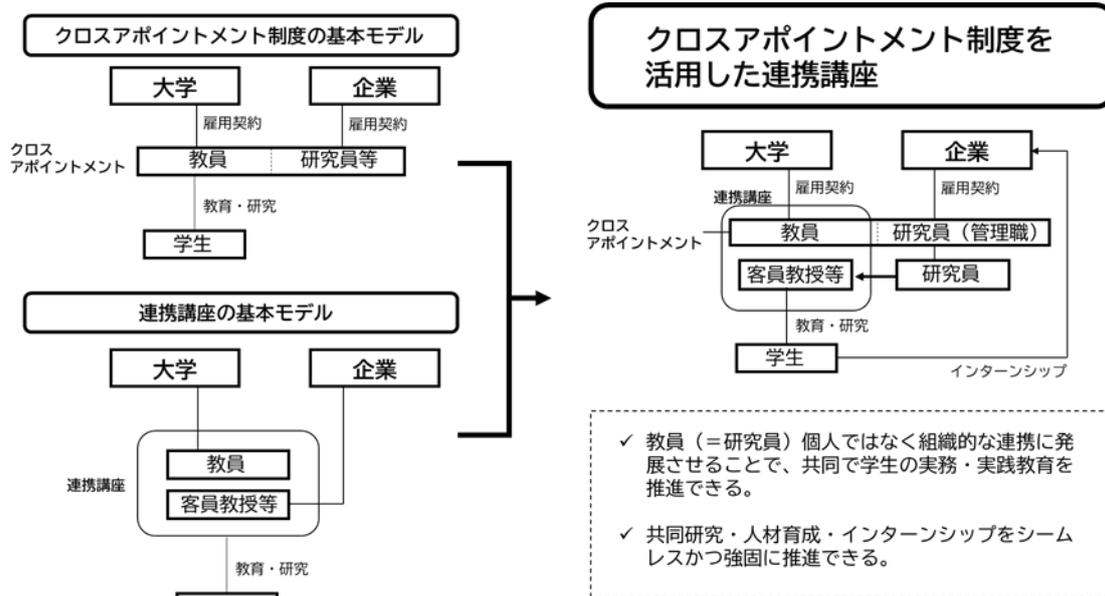
本学と不二製油グループ本社株式会社は、3月22日、両者の連携・協力に関する協定書を締結し、クロスアポイントメント制度を活用した連携講座の運用を4月より開始いたします。大学所属の教員をクロスアポイントメント制度によって他の企業へ派遣する事例が注目される中、その取り組みと連携講座のモデルとを発展的に組み合わせ、産学連携による教育・研究を強固に推進する体制を構築します。

農学部では、食・農の生産や加工に関わってグローバル規模で活躍できる人材の育成を進めており、食品の安全性確保のための国際的な衛生管理方法・HACCP（ハサップ）に対応した加工実験設備を有する「フードイノベーション棟」を2018年に新設するなど、産学官連携による研究・人材育成を推進しています。

また、不二製油グループは、植物性油脂、業務用チョコレート、乳化・発酵素材、大豆加工素材の四事業を軸に、おいしさと健康を実現するための食品素材の開発、生産、販売を、グローバル規模で展開しています。世界の食の課題、とりわけ食料不足の解決に役立つ技術力と課題解決力から生まれる2つの価値を同時に追求するPlant-Based Food Solutionsを提供しながら人と地球の健康という課題に対応することで、研究開発を推進してサステナブルに成長するグローバル企業を目指しております。

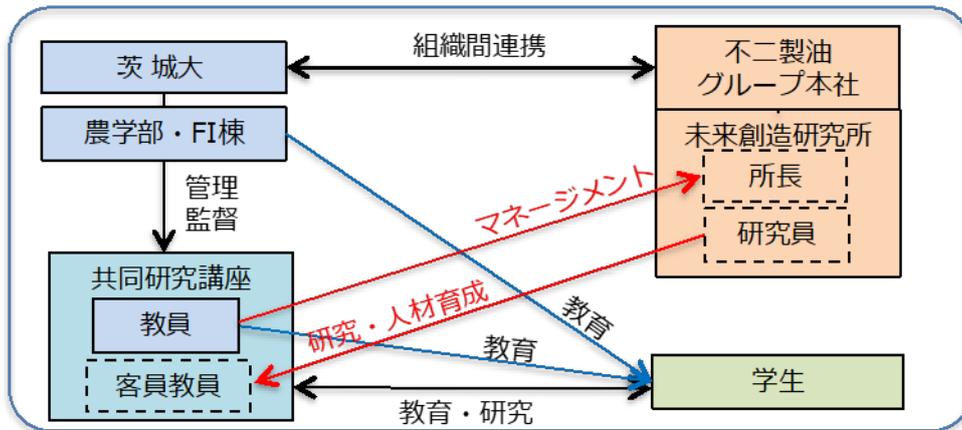
両者においては、2018年7月に、クロスアポイントメント制度に関する協定を締結し、農学部の中村彰宏准教授（当時／2019年4月より教授）として茨城大学で教育・研究に携わる傍ら、不二製油グループ本社においては主席研究員として業務を開始しました。その後、2020年4月に、不二製油グループ本社において新たな価値創出につながる基盤研究に取り組む「未来創造研究所」を刷新するにあたって、同研究所の所長（執行役員）に就任。以降、茨城大学と不二製油グループとの間のより組織的・戦略的な連携のあり方を検討してきました。

今回、連携・協力に関する協定書を締結するのに伴い、農学部内の新たな研究拠点として、「不二製油グループ本社『食の創造』講座」という連携講座を共同で開設します。ここでは、中村とともに、不二製油グループ本社から派遣する客員教授等が学生の教育・研究指導にあたります。この体制において、現状のクロスアポイントメントをベースにしながら、茨城大学の教員かつ不二製油グループ本社未来創造研究所長として、これらの連携講座を両者の立場からマネージし、両者の共同研究、茨城大学の学生、不二製油グループ本社の従業員（研究員）の人材育成、学生のインターンシップの場の創出・支援などを一体的に運用することで、産学連携による教育・研究をシームレスかつ強固に推進していきます。また、この取り組みを通じて、不二製油グループにとっては定年退職者を含めたシニア研究員の活躍の場が広がります。本講座は働き方改革の一環としても推進していくもので、特定の分野で経験豊かな研究員が将来を担う若者の教育研究に携わることには大きな意義があると考えています。

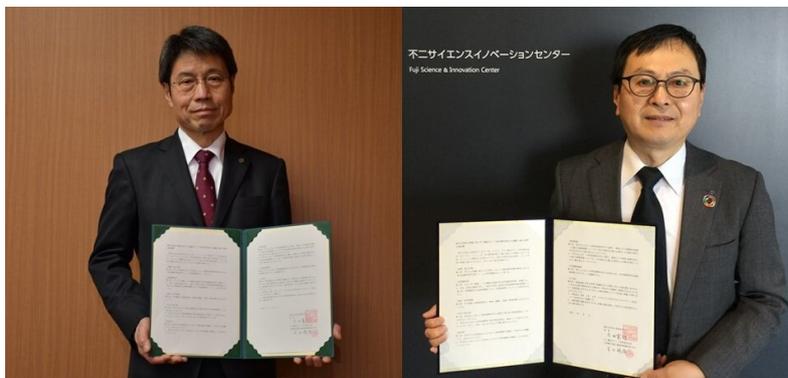


従来のクロスアポイントメント制度及び連携講座の基本モデルとそれらを発展的に組み合わせた「クロスアポイントメント制度を活用した連携講座」の運用イメージ

連携・協力協定によるクロスアポイントメント運用モデル



教員が企業に、企業研究員が大学で兼務する。
学内に研究拠点を構え教育研究を推進する発展モデル



◆ 令和2年度卒業式・学位記伝達式を挙行

3月23日、令和2年度茨城大学卒業式を挙行し、2008人が学位あるいは修了証を授与されました。

今年度は感染症対策として、例年（昨年度は中止）の茨城県武道館での一斉開催を取りやめ、水戸キャンパス講堂における全学総代参列による小規模な式典のライブ動画を配信し、教室や自宅等で視聴する形式とし、学位記伝達は、学科・コース等ごとに実施することとなりました。



◆ 令和2年度卒業式 学長告辞

本日、学部・専攻科・大学院の卒業式・修了式を迎えた2008名のみなさん、卒業、修了おめでとうございます。学業を成し遂げ、この日を迎えられることを、心からお祝いいたします。そして、みなさんの学業と研究活動を支えてこられたご家族や友人の方々にも心からお祝い申し上げます。

本年度も、新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するために、一堂に会しての式典は実施しないで、ライブ配信で行うこととしました。人生の節目としてかけがえのない式典であり、とても残念ですが、離れていても心はひとつにして、皆さんの卒業・修了をお祝いしたいと思います。

キャンパスの景色は梅から桜に変わりました。卒業・修了の時期は、花の季節であり春の息吹を感じる時です。先日、ふと手に取った世阿弥の風姿花伝の書のなかに、「花を知る事」という書き出しの一節があり、「花と、面白きと、めずらしきと、これ三つは同じ心なり」という文のあとに、「住する所なきを、まず花と知るべし」という言葉に出会いました。「住する所なき」とは、ひとつの状態に留まっていないことです。つまり、いつまでも咲き続ける花などないように、変化することが、花の本質であり、面白さやめずらしさにつながる、と世阿弥は説いています。



世阿弥は能という芸道について語っているのですが、その言葉は学業や研究にも当てはまると思いませんか。学業で考えれば、みなさんが大学に入学したときを振り返って下さい。そのときと比べれば、目的をもって学業を成し遂げた今、みなさんの知識の範囲は広がり、専門的な知識やスキルを身につけたはずです。

さらに友人との交流によって考え方も変わったかもしれません。みなさんは大学という場を通して、変わったはずです。その変化があってこそ、卒業・修了という日を迎え、大きく咲かせたみなさん自身の「花」の面白さ、めずらしさがあり、周囲の人たちが今日のみなさんを注目して称賛する理由がそこにあると思います。

しかし、咲き続ける花はありません。みなさんは、これまで培った学識と経験を社会の中で活用し、さらに深めて、それぞれの分野で目的をもって変化していく自分を作り続けて下さい。みなさんが社会の中で変化を続け、また新しい花を咲かせてくれることを、心より期待しています。

また、これからみなさんの母校となる本学も、同じように変化をし、花を咲かせていなくてはなりません。私たちはイバダイ・ビジョン 2030 を策定しました。2030 年に茨城大学はこうありたいという姿について、教職員だけでなく学生のみなさんとの議論を経て、4つのビジョンと12のアクションをまとめました。これから、具体的な施策を通して、大学は変わっていきます。ビジョンのなかでは、SDGs（持続可能な開発目標）も視野に入れ、深刻化する社会課題の解決に向けて、学問分野間での連携を強化していきます。

私たちは、みなさんのこれからの変化と活躍を見守ると同時に、みなさんも茨城大学の2030年の姿を期待してください。

最後に、ここで紹介したいメッセージがあります。10年前、東日本大震災が起こる前日に、特別講義を終えてアメリカに帰国した先生から、被災した茨大生へのメッセージです。10年の月日が過ぎましたが、被災の辛さがまだ残り、COVID-19という新たな災禍に見舞われている今だからこそ、もう一度読み直しました。みなさんが困難に陥ったとき、変わることに挑戦するとき、しかし夢が見えなくなって立ち止まり辛くなったとき、そのようなときのエールとして聞いてください。メッセージのなかで、they はみなさんであり、we は私たち教職員だと思って下さい。

Please let your students know that the work they have ahead of them is going

to be very challenging. They will find difficult times and they will find good ones. In the end, they will succeed, and all of us, everywhere, will be proud of them, and we will be stronger and better for their successes.

Your friends are standing with you...

みなさんが胸を張って活躍するために、本学は教育研究をもっと強化し、改善していきます。

本日は誠にありがとうございます。



卒業式の模様は各教室に配信された



学科・コース等ごとに執り行われた
学位記伝達式



◆ 「イバダイ・ビジョン2030」を策定 太田学長が会見で発表

太田寛行学長は、3月31日、水戸キャンパスで行った記者会見において、2030年をターゲットとした新たな大学運営ビジョンである「イバダイ・ビジョン2030」を発表しました。

記者会見で太田学長は、国立大学の諸課題や茨城県内の高等教育の状況について説明。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、日本の都市一極集中の脆さが露わとなった中、デジタル技術も活用しながら社会機能を地方に分散させることが持続可能な社会において不可欠だと指摘。そうした社会における地方国立大学の新たなあり方を示すものとして、「イバダイ・ビジョン2030」を制定したと説明しました。

同ビジョンでは、大学が見据える社会目標として、「自律的でレジリエントな地域が基盤となる持続可能な社会の実現」を掲げ、そのために求められる大学の役割を、①世界の俯瞰的理解と多様な専門分野の知の追究、②多様な主体を結びつける結節点としての機能強化、③持続可能な環境づくりのための先進的行動の展開としています。それを踏まえ、「教育」「研究」「地域連携、グローバル化」「大学運営」という4つの分野にわたるビジョンと、それらに紐づいた12のアクションを制定しました。

太田学長は、「2030年にこうありたいという姿について、教職員や学生との議論を経て、ビジョンにまとめた。同じく2030年をターゲットとするSDGsも意識しながら、共感と参加に基づく開かれた大学運営を進めていく」と決意を表明しました。



「イバダイ・ビジョン2030」を発表した太田学長

◆ 令和元年度台風19号災害調査団 最終報告書を発行

3月31日、本学の「令和元年度台風19号災害調査団」による最終報告書を発行しました。

2019年10月に全国各地で甚大な被害をもたらした台風19号の発生後、本学では災害調査団を発足させ、「被災過程解明」「農業・生態系」「情報伝達・避難行動」「住民ケア支援」「文化財レスキュー」という5つのグループに、災害支援に対する自治体の情報発信、洪水に対する地域強靱化、中小企業の事業継続計画（BCP）の検証といったテーマを加えた8つの調査チームで現地調査などを進めてきました。

今回発行した最終報告書では、那珂川・久慈川水系などの堤防の決壊や周辺の浸水状況の現地調査、自治体の情報の伝達経路と避難行動についての調査、被災者や自治体、企業、報道関係者へのヒアリング調査など、多岐にわたる調査の結果を報告しています。あわせて、国土強靱化、防災・減災のあり方、さらには今後求められる気候変動適応策などを提言しています。

共同団長を務めた伊藤哲司・人文社会科学部教授、横木裕宗・大学院理工学研究科教授は、連名で寄せた文章で、「今回の台風災害に気候変動の影響がどのくらいあったかについては科学的な解明が必要ですが、毎年のように甚大な災害が発生している現実からすれば、私たちはますます変化しつつある環境にどう適応していったらよいかのがすでに問われています。茨城大学はこれからも、世界的な課題となっている気候変動とそこへの適応に関する知見も生み出していきます」と記しています。

この報告書は、調査団の活動への支援者や調査協力者などに配付するほか、本学のホームページからデータ版（PDF）を閲覧できます。

